
~生まれた意味を知る物語~溢れる想い、再会。

Ic-hi ↗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～生まれた意味を知る物語～溢れる想い、再会。

【Zコード】

Z8610E

【作者名】

I C - H Y A

【あらすじ】

ルークが、ローライを解放してから一年……ふさぎこんでいたティアがタル渓谷に行つた先には……。テイルズオブジアビスの中のエンディングのアナザーエディションを描いた一作読みきり編。

(前書き)

テイルズオブジアビスの、
エンディングのアナザーハーディシヨンです。

「ルーク……好き。」

ティアは、ルークがローレライを解放する直前、別れ際に言ったコトバを思いかえした。

「あの日から、一年が経とうとしている……」

ティアは、ルークが生きていれば20歳になる……なんて事を考えていた。ティアは、今も変わらずにユリアシティでルークを待つている日々を過ごしていた。

そんな時、ティアの部屋に客人が来たと言うのだ。

ジェイドだった。

ジェイドは金髪をなびかせて、いつもの微笑みを浮かべながら部屋に入った。

「大佐…? どうして…」

ティアは、突然ジョイドが来たために驚いていた。

ジョイドは、ニコラと笑つて眼鏡に手をあてながら言った。

「一応、將軍なのですがね~」

「あつ、『めんなさい』…」

ティアは、申し訳なく思ったよ~つだ。

ジョイドは、真剣な表情で言つ。

「皮肉ですね、フリングス將軍と、ルークの事が重なったために…私が將軍になるなんて。」

「はい…ルークは、約束しましたよね。帰つてくるつて…。」

さすがのジョイドも、ティアに対しても答へられなかつた。

「…………。」

ジョイドは、しばらくの沈黙の後に持ち前のお茶目でティアを和ませよ~つとした。

「ペラペラペラペラペラペラペラ…ペラペラペラペラ」

「へ。どうなさいましたか？」

「いえ…… 口が、止まらなくなっちゃになりました。」

「『』めんなさい…… 気をつかつていただいてしまって。」

ティアはジョイドの気遣いに感謝した。

ジョイドが穏やかな顔つきを見せた。

「かまいませんよ…… わたしは。それより、ティアさんがそんなに弱々しいと、私が惚れちゃいますよ~。」

いきなりジョイドがまたお茶目な顔つきに戻った。

「ふふっ……」

ティアがよつやく笑つた。

「呼びにくいくから、大佐と呼ばせてもらひます。何か、『』用があつて、來たのですか？」

ジョイドは、真剣な表情で囁く。

「ふん……」名答。実は……ルークの成人式が、明日、バチカルで執り行われるようです。それを、お伝えに参りました。」

「やうでしたか……、ピオーネ陛下にも……御礼を囁いておこして下さいますか？」

ティアは、ジョイドがピオーネに頼まれて来たと思つてゐるやうだ。

「おや？私は、私の意思でここに来たんですよ……。ティアさんが、コリアシティにこもりっぱなしだと、先日、ガイに聞いてですが……。ティアさんにこの事を、「」報告差し上げに参るうかと……。」

「あ、やうでしたか……勘違いしてました……あつがどうぞここにます！」

「よつやく、ティアさんの笑顔を取り戻したんで……そろそろ行きますね。」

「あ、はい……いろいろあつがどうぞしました。」

ジョイドは、ティアの部屋をあとにした。

その夜……。

ティアは、辻馬車を使ってタタル渓谷に向かった。そして、ちょうどホド諸島が見渡せる高台に向かった。

月光が照らす幻想的な渓谷で、ティアは懐かしい少年の姿を思い浮かべていた……。その時……まるで、渓谷の谷の端に、彼が立つて居るようを見えた……。

(ルーク…………／＼／)

ティアは、幻覚を見たのだと思い……瞳をとじた……。

そんな時、ティアの背後から魔物が襲いかかってきた……。

魔物は、ソードダンサーのようだが、少し、違つて白銀系統の鎧をきていた。

ティアは魔物が迫つて来るのに気づいたが、もう遅かった……。

次の瞬間、誰かが瞬速で走ってきて、魔物を斬り倒した。

「伏せてる……」

赤毛の長髪に、白い見慣れた上着を着て、首には黒いスカーフを巻いていた。

ティアが、言われたとおりに伏せて男をぼんやりと見つめていた。

「ものす！」勢いで立ち上がって男に斬りかかった、ソードダンサーの恐ろしいほどの連続攻撃を防いで、剣から発した閃光でソードダンサーを巻き上げた……。

「で やああああ！――！」

「消えちまいな……集え！……響け！……全てを滅する刃と、かせ……くらえ！……ロスト・フォン・ドライブ――！」

男は、巻き上げたソードダンサーを無数に斬り刻んで、最後にヒビめの一撃をぶちこんだ。

ソードダンサーは、消滅した……。

謎の男は、確かにローレライの鍵をもつていて……かつて、見たことのある技を放つた。

「ル……ルーク……？」

ティアは、懐かしい雰囲気をもつた男の後ろ姿を見ていたら……ルークと重なつて見えた。

その時……ティアの方を向いた、ゆっくりとティアに近寄ってきた。

ティアは、男を見上げた。

「あ……！」

男は、ティアの瞳を見つめたまま黙っていた。

「…………。」

ティアに無言で、手を差しのべた。ティアは、男の手をとつて立ち上がつた。

ティアは、涙を流していた……確かに、ルーク・フォン・ファブレの姿だつた。

ルークは、こわばつた表情をといて……大人びた優しい微笑みを浮か

べて、優しくおちついた声で言った。

「……ここからなら、ホドがよく見渡せる……それに……約束してたからな。」

ティアは、ルークに抱きついた。

「……ルーク……！」

ティアはルークを強く抱きしめた後に、ルークの肩に両手を滑らせて両肩をしつかりにぎりしめて……ルークの額に自分の額をあてながら言った。

「……バカ……ルークのバカ……！」

ルークは、ティアの額に自分の額をあてて、ティアの瞳をじっと見ながら言った。

「ティアが……俺の生きる意味だ……ティアに出逢うために生まれた

……」

ティアは、照れながらルークにしか聞こえないような声で言つた。

「ルーク……//／私も、あなたに出逢つためよ……。」

二人は、互いに背中に手をまわしながらキスをした。

} fin {

(後書き)

一作の短編です。
テイルズと言えばーと、思つてアナザーハンティング・ハイションを書きました。

「感想や、要望などあつまいたらよろしくお願ひしますー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8610e/>

～生まれた意味を知る物語～溢れる想い、再会。

2010年10月9日03時47分発行